

アサイラムをアジールとして生きる

—あるハンセン病療養所入所者からの聞き取り—

福岡安則

わたしは、2003年4月から2005年3月まで、厚労省の第三者機関「ハンセン病問題に関する検証会議」の「検討会委員」を委嘱されて以降、共同研究者の黒坂愛衣とともに、ハンセン病回復者（入所者、退所者）やその家族からのライフストーリー聞き取りを精力的に実施してきた。ある時点で聞き取り対象者の人数が300人を超えてからは、いちいちカウントするのはやめた。2012年からは毎年、韓国でのフィールドワークも実施してきている。

わたしは、自分の聞き取りの方法を《多事例対比解読法》と名づけている。できるだけ多数の聞き取り事例を相互に突き合わせることで、そこから浮かび上がってくる社会的に意味あることがらを読み取るという手法である。この方法によって気づいた大事なことは、次のことである。

日本のハンセン病療養所の「入所者」たちからの聞き取りでは、“ここに閉じ込められたせいで、自分の一生は台無しにされた”との「怒りの語り」と、“ここにに入れてもらったおかげで、いまこうして生きていられる”との「感謝の語り」とが拮抗している。「退所者」たちに「もっと年をとって、身体が不自由になったら、どうしますか？」と尋ねると、「療養所に戻りたい」と答える人と、「療養所だけには戻らない」と言う人が拮抗している。（ちなみに、韓国各地の定着村での聞き取り¹でも、「年をとって不自由になったら、ソロクトに戻りたい」という声と、「ソロクトにだけは行きたくない」という声が拮抗していた。）

わたしの読み解きは、こうだ。——「怒りの語り」を語る人びとは、社会のなかで自分はこんなことをして生きていきたいという夢をもっていたのに、ある日、強制収容されて、療養所に閉じ込められた体験をもつ。あるいは、療養所に収容されたときにはすでに無菌、自然治癒していて、療養所でハンセン病治療を一度も受けたことがなかった体験をもっていたりする。それに対して、「感謝の語り」を語る人びとは、ハンセン病の発症が地域社会の人びとに知られ、社会のなかから自分の居場所を奪われてしまった体験をもつ。あるいは、家族に匿われているあいだは治療の方途がなく、明日をも知れぬ重い症状になってから療養所に収容され、療養所に入ったことで一命を取り留めた体験をもっていたりする。

じつは、「怒りの語り」も「感謝の語り」も、いずれも、強制隔離政策と無癩県運動によってつくり出された意識であるが、「怒りの語り」を語る人びとがハンセン病療養所を「アサイラム」として生きた人びとであるのにたいして、「感謝の語り」を語る人びとはハンセン病療養所を「アジール」として生きた人びとである、と言えよう。「アサイラム」（英語で“asylum”）とは、外の社会では誰もが享受できるはずの自由を奪われた空間、ひとを閉じ込める空間のことだ。「アジール」（ドイツ語で“Asyl”）とは、外の社会の迫害から身を守ってくれる聖域であり、逃げ込む場所のことだ。この2つの言葉が、もともとのギリシア語に遡れば、同一の言葉だったというのが面白い。

本報告では、熊本県合志市の国立ハンセン病療養所「菊池恵楓園」の入所者MI（男性、1931年1月生）から聞き取ったライフストーリーを紹介したい（2015.7.8聞き取り）。一言でいえば、MIは、《ハンセン病療養所が「アサイラム」と知ったうえで、開き直って、「アジール」として生きてきた》という人物である。「治っても帰してくれないので、後は、好きに生きてきた」と語る。傑作なのは、気の合った療友たちと園内にホールが4つある「ゴルフ練習場」までつくらせてしまった、という次第。

¹ わたしたちがこの5年間の韓国調査で訪ねたのは、「国立ソロクト病院」が2回、民間の宗教施設もしくは病院が3カ所（安東の「星座園」、ソウル近郊の「聖ラザロ園」、麗水の「愛養園」）、当事者の全国組織が運営する施設が1カ所（忠清北道の「Evergreen Welfare Center」）、そして12の「定着村」である。